花ある季節

安西篤子

花ある季節

安西篤子

読売新聞社

著者紹介――――――あんざい　あつこ
1927年8月11日神戸生まれ。
1964年下半期「張少子の話」で第52回直木賞受賞。「家康の母」「女人紋様」「悲愁中宮」「千姫微笑」「泣かない女」「累卵」「義経の母」「壇の浦残花抄」ほか著書多数。

花ある季節

著　者――安西篤子
編集人――篠原義近
発行人――杉林　昇
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇―五五
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
名古屋市中区栄一の一七の六　〒四六〇

印刷所――図書印刷株式会社
製本所――ナショナル製本協同組合
第一刷――一九九〇年（平成二年）二月十八日
第二刷――一九九〇年（平成二年）三月二十九日

ISBN 4-643-90004-0　C 0093

© 1990, Atsuko Anzai
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

花ある季節　目次

フカのひれスープ　7
紅梅白梅　30
カラスの声　55
タヌキ　81
花・花・花　105
本命？　134
危機　168

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

夏が来た　209
潜入ルポ　245
三対一　281
母さんは、どこだ　316
駈落　356
ライフ・ワーク　410
掲載紙　425

装丁　中島かほる
装画　岩崎みわ子

花ある季節

フカのひれスープ

呼び鈴が鳴ったとき、志郎は郵便がきたと思った。枕元の目覚まし時計をみると、十一時である。カーテンの隙間から明るい日差しがのぞいていた。

「おうい」

一応、返辞をしておいて、志郎はふとんの脇に脱ぎ棄ててあったガウンをとって羽織ると、ベルトを結びながら玄関へいそいだ。

このところ、月末で幾つか原稿料が送られてきている。銀行振り込みの分もあるが、書留で送られてくるものもある。

「ほいほい、お待たせ」

顔馴染みの配達員がいるものと思って、志郎は勢いよくドアをあけた。ところがそこに立っていたのは、思いもよらない人物だった。

「なんだ、姉さんかあ」

「姉さんか、はご挨拶ね」

にこりともせずに言い棄てると、姉は内側に毛皮のついたブーツを脱いで、さっさと上がってき

た。

志郎には三人の姉がいるが、この姉はいちばん上で、蘭子といい、五十七歳になる。

ちいさいころから志郎は、この長姉に頭が上がらなかった。今年三十八歳の志郎からみると十九も年上で、まるで母親のようなものである。末っ子の志郎を生んだあと、母親の産後の肥立ちが悪かったので、蘭子がおむつを替え、ミルクを飲ませ、入浴もさせたという。これでは頭が上がらないのも当然であろう。

そればかりではない。長身だった父親の信太郎に似たのか、蘭子も女にしては上背があり、中年過ぎからはそこへ肉がついて、堂々たる貫禄になった。しかも五人きょうだいの総領のせいか、きょうだいに対して態度がデカい。

二畳のキッチンの奥に続く三畳と六畳二間を見渡して、蘭子は「ふうん」と唸った。

どういうわけで姉が唸ったのかわからないので、志郎は姉の横でまごまごしている。

去年の暮れにガールフレンドの佐恵が来てくれて、二人で部屋の中を片づけたから、いつもよりはきれいになっている。それでも一か月足らずのうちに、まただいぶ散らかりはじめた。居間に使っている三畳の電気炬燵の上には、煙草の吸い殻の山盛りになった灰皿や、ウイスキーの瓶やコップ、爪切りや電動の髭剃り、そのほかなにやかやが雑然とのっているし、畳のあちこちには新聞や雑誌、それになぜか汚れたパンツまで放り出してある。屑籠は紙屑でいっぱいになっている。

奥の六畳の寝室は、更にひどい。万年床を中心に、脱いだ衣類、読みさしの本、またここにも吸い殻いっぱいの灰皿、底に黒い液体の溜まったコーヒー・カップ、洗濯物をとり出したあとのクリーニング店のビニール袋などで、足の踏み場もないほどである。

「なるほどね」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

姉はうなずくと、志郎をふり返ってはじめてにっこりした。

「姉さん、なんの用？」

志郎は身長は百八十センチ近くあるが、ひょろひょろと痩せている。それでなるべく蘭子に気圧されないように、肩を張って尋ねた。いまごろになって、姉がなんのために訪ねてきたのかふしぎに思いはじめたのである。

「いえね、ちょっとこの近くに用事があったんで、あんたのことを思い出したの。どんな暮らしをしているのか、見たいと思ってね」

けれども、その説明だけでは志郎は納得できかねた。離婚する前に妻の時子と暮らしていたマンションへも、姉は一度も顔を出したことはない。ふいに訪ねてきたのには、なにかわけがあるに違いない。

「とにかく坐ったら。いまお茶を淹れるよ」

炬燵のスイッチを入れて志郎がすすめると、蘭子はミンクのハーフコートを脱いで炬燵に膝を入れた。

「でも、思ったよりいい住まいだわ」

窓のカーテンを開けている志郎の背後から、姉が声をかけた。

「陽当たりもよさそうだし」

「うん、まあまあさ」

志郎としては、このマンションでの暮らしがわりあい気に入っていた。東京・世田谷にあり、小田急線の駅へ十分ほどで行ける。周囲は閑静な住宅街で、家で仕事をするのに好都合だし、二、三分も

歩けば、パチンコ屋や本屋、中華そば屋のある商店街に出られる。志郎はフリーのライターである。

「ええっと、お茶は切らしてたな。インスタント・コーヒーでいい？」

キッチンでガスに薬缶をかけながら志郎が訊くのへ、「いいわよ」と答えながら、姉はこんどは三畳の窓の下に据えた書物机の上をじろじろ見ている。さすがにそこだけは片づいていて、書きかけの原稿用紙が置いてある。

「ねえ、このぐらいの部屋で、家賃はいくら取られるの？」

コーヒーにミルク入れと砂糖壺を添えて持って行くと、姉がなにげなさそうに尋ねた。

「うーん、わりと高いよ」

じつはそれが目下、志郎の頭痛の種だった。

四年前に別れるまで、志郎は時子といっしょに中央線の三鷹駅に近いマンションに住んでいた。月々のローンの返済は、かなり高額だったが、時子も働いて二人で支払っていたから、それほど骨が折れもしなかった。

写真家の時子は、ここ数年来、めきめきと売り出し、仕事も眼に見えてふえていった。旅に出る機会も多く、そのうちに男もでき、志郎も自分の側に縛りつけておくのが可哀そうになって別れた。子供はいなかった。マンションの頭金を払ったのは志郎だが、黙って時子に譲って出てきた。もっとも、志郎一人では今後のローンの支払いは不可能でもあった。

三鷹のマンションを出てこちらへ移るとき、家賃がいくぶん高過ぎるかな、という危惧を抱かぬでもなかった。が、仕事柄、あまり不便な所では困るし、なんとかなるだろうと高を括る気持ちもあった。しかし、暮らしはじめてみると、かなり負担が重い。好きなウイスキーの質を落としたり、食費を切り詰めたり、いろいろ苦労してきた。

「当ててみようか」
コーヒーを飲み終わると、蘭子はあらためてあたりを見まわし、
「まず、十万といったところね」
「姉さん、よく知ってるなあ」
ぴたりと当てられて、志郎は眼を丸くしている。
「わかりますとも。ダテに年はとっていないわよ」
蘭子は得意顔である。
「家賃が十万もするんじゃあ、かなり骨でしょう」
これも図星を指されて志郎は言葉もない。
大学を出たあと、志郎は大手の出版社に勤めた。そこで週刊誌や婦人雑誌の編集を手がけるうち、インタビューのまとめや、旅行ガイドの記事など書き、それがおもしろくなった。社内で上司と衝突し、営業に廻されそうになったのを機会に退職し、フリーになった。仕事をくれそうなあても幾つかあったし、当分は時子の収入に頼って暮らすつもりで、先の心配などはしなかった。たしかに仕事は途切れることなく続けてこられたが、離婚は誤算だった。
それでも、根がのんきな志郎は、べつだん悩んでもいない。いつ大きな仕事が舞いこむかも知れないし、選り好みをしなければ、なんとか食いつなげる。
そろそろ、注文仕事ばかりでなく、書きたいものを書こうという欲もあるが、それもかくべつ急ぐことでもない。
「さてと」
蘭子は腕時計を見ながら腰を上げた。

「あんたもいい加減に着替えなさいよ。まさか一日中、パジャマでいるつもりじゃないでしょ」
「うん、それはそうだけど」
ふだん、午後一時ごろまで寝ている志郎は、姉が帰ったらもう一度、寝直そうと思っていたのである。
「もうそろそろ十二時よ。今日は姉さんが昼御飯を奢ってあげる。なにがいい？」
「そうだなあ」
まだ胃袋が眼を覚まさない感じで、志郎はこれといって食べたいものも思いつかない。
「あんた、中華料理が好きだったわね。新宿に桃林というちょっとおいしい店があるのよ。フカのひれのスープなんか、どう？」
そう聞いたとたんに、志郎の胃袋がぐうと鳴った。フカのひれなどここしばらく口にしたことがない。
姉の蘭子にせき立てられながら、志郎はパジャマを脱いで、オープンシャツにズボン、それに紺のブレザーを着こんだ。もうじき二月という一年中でもいちばん寒い季節だが、今年は新年から暖かい日和が続いている。コートは着ずに、クリスマス・プレゼントに佐恵からもらったカシミヤのマフラーを巻いたなりで、志郎は姉に続いて外へ出た。
中華料理店「桃林」は、新宿駅から近いビルの地下にあった。厚いガラス扉を入ると、ロビーにはいちめんに段通が敷きつめられ、紫檀に彫刻をほどこして玉をはめこんだ屏風やテーブル、椅子が置いてある。姉が受付で名を告げると、翡翠色の繻子の制服を着た女の子がにっこりして、
「お連れ様がお待ちでございます」

と言った。
――え？　連れって誰だ？
店内の豪華な造りといい、連れのある様子といい、志郎にとっては意表をつかれることばかりである。なんとなく逃げ出したい心境になっていると、姉はたちまち感づいたのか、志郎の腕を捉えた。
「さ、こっちよ」
有無を言わさぬ勢いで、案内の女の子のあとから志郎を引っ張ってゆく。
二人が個室の一つに足を踏み入れると、
「あらア、来たのね」
「遅かったじゃないの」
嬌声があがって、そこに待ち受けていたのは、二番目の姉の百合と、三番目の姉の桃恵だった。
「なんだ、なんだ、これは」
志郎はますます狼狽する。しかし蘭子はおかまいなしに弟を椅子の一つに坐らせた。
「たまにはきょうだいが集まって食事するのも、わるくないじゃないの」
「そうよ、そうよ。今年はお正月にあんなことがあって、きょうだいが揃わなかったからね」
百合がすかさず相槌を打つ。蘭子と百合は必ずしも仲が良くないのだが、今日はなぜか息が合っている。
「さて、なににする？」
女三人はさっそくメニューと睨めっこをはじめた。
「トリとギンナンの炒めたの」
まず桃恵が叫ぶ。

「あたしはエビのチリソース煮と、カニの爪を揚げたの」
百合が落ちついた口調で申し出る。
「ここのオコゲ料理、おいしいのよ」
と蘭子。
「じゃ、それも」
「スープはフカのひれね、志郎ちゃん」
蘭子が意味ありげに志郎に眼配せして笑った。三十八にもなってちゃんづけで呼ばれるのは、あまり気持ちのいいものではない。
「ほかには？」
「早く決めてェ。あたし朝ご飯抜きできたのよオ」
姉たちの浮かれっぷりを、志郎は疑惑の眼でみつめた。どうもいやな予感がしてならない。
「どうしたのよ、志郎ちゃん、さあ、お飲みなさいよ」
料理といっしょに運ばれてきた老酒の銚子をとり上げて、桃恵が注いでくれた。
三人の姉たちの中では、この桃恵に、志郎はいちばん親しみを感じる。桃恵は五歳年長で、志郎が小学校へ上がったとき六年生だった。学校の行き帰りなどにずいぶん面倒を見てもらった。桃恵の友だちが家へ遊びにくると、志郎も仲間に入れてくれる。いまでも、ほかのきょうだいよりは口がききやすい。
「これ、どういうこと？」
幸い隣同士だったので、志郎はこっそり桃恵に訊いてみた。しかし桃恵が答える前に、向かい側の蘭子に見咎められてしまった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc